医療最前線 >>> vol.33
神経内科

Report!

認知症患者に大きな心で寄り添う

by 川崎医科大学附属病院

高齢者の約一五パーセント。今も増え続ける認知症。

「まずは認知症の現状を知っていただくために数字の話をします。現在、患者数は高齢者（六五歳以上）の約一五パーセント、全国で四六〇万人と推定されています。予備群、つまり軽度認知障害の方が四〇〇万人ですから合計で八六〇万人。これは高齢者の実に二〇人に三人という数字で、その数は今も増え続けています」と語るのは神経内科の砂田芳秀教授。指導医、専門医として長年、認知症患者と向き合い、神経内科のトップとして当院の認知症疾患医療センター長も兼務している。

今や社会問題にもなっている認知症だが、認知症とはあくまでも症状の名称で、認知症という病気があるわけではない。原因となるのは、よく知られるアルツハイマー病が約七〇パーセント。ただほかにもさまざまな要因が考えられ、病気によって対処が違うため正確な鑑別診断が治療には不可欠とされている。

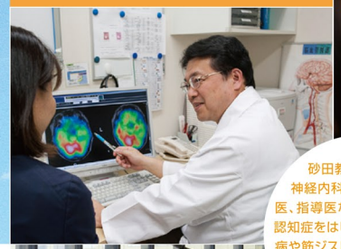
「アルツハイマー病の一番の症状は『物忘れ』です。物の置き忘れ、しまい忘れ、名前が思い出せない、同じことを何度も言う…。ここで問題なのは本人に自覚がないことです。そのため当科に本人がひとりで来られることはまれで、ご家族が同伴されるケースがほとんどです。治療は薬（現在、四種類）による対症療法がおもで、症状の進行をゆるやかにすることができます」。残念ながら今のところアルツハイマー病の根本的治癒は難しいとされている。いかに治療していくかは世界的な課題だ。

多忙なため、なかなか趣味を愉しむ時間もないとのこと。「本を読んだり、映画を観たり、音楽を聴いたりして気分転換しています」。ちなみに大学時代はボート部に所属。5年生の時、琵琶湖で開催された関西選手権（大学生、社会人が参加）では3位表彰台の輝かしい戦績も。「あの頃は合宿所に年間100日くらいいました（笑）」。そう話すにこやかな笑顔は青春時代そのもの。

砂田 芳秀 教授
Yoshihide Sunada

■認定医・専門医・指導医
日本内科学会認定内科医・指導医、日本神経学会神経内科専門医・指導医、日本頭痛学会専門医、日本認知症学会専門医・指導医
■専門分野
神経疾患全般、神経筋疾患、パーキンソン病、認知症

脳や脊髄、末梢神経、筋肉を侵す病気を診断し、患者に応じたさまざまな内科的治療を実施。PET、MRI、電気生理学的検査、神経超音波、血管造影検査などを駆使した専門性の高い診断を行なっている。脳卒中や神経難病で機能障害を残す場合にはリハビリテーション科と協力し、患者の社会復帰をサポートしている。



砂田教授が率いる神経内科には現在、専門医、指導医などの医師が在籍。認知症をはじめ、パーキンソン病や筋ジストロフィー、脊髄小脳変性症といった治療の難しい疾患にも幅広く対応している。

大切なのは正確な鑑別診断、適正な薬の投与、周囲の理解。

患者数の多さや日常生活への支障からも社会的に影響の大きい認知症。最近の臨床研究では、アルツハイマー病の症状が出る前に脳内で起きている異変に正確な診断を施し、抗体薬などで発症を防ぐ『先制医療』が注目されている。そのために必要な検査機器と専門性の高いスタッフを有する当科への期待が近年さらに高まっている。

「当院では、PETやMRIでの画像検査や脳血流シンチグラフィによる特殊検査、遺伝子診断などを駆使して、より正確な鑑別診断に努めています」。

最後に、長年、認知症患者に寄り添ってきた砂田教授があらためて思うことは…。

「認知症治療で大切なのは検査や薬はもちろんですが、やはり周囲の理解、特に家族の存在です。混乱しがちな患者さんを大きな心で受け入れる姿勢が大事です。そして大学病院は、患者さんやご家族にとっては最後の砦。完治が難しい病気ですが、だからこそ私たち医師も諦めないで最後まで寄り添う。そんな思いで診療に取り組んでいます」。

二〇一三年から難病のミトコンドリア脳筋症『MELAS（メラス）』の医師主導治験も行なっている砂田教授。加えて筋ジストロフィーも研究テーマのひとつだ。大学病院としての安心と信頼、さらなる取り組みへ――、当科の歩みは続く。

お問合せ
川崎医科大学附属病院
☎086-462-1111
http://www.kawasaki-m.ac.jp/hospital/

■2014年8月25日号掲載

本文中の医学情報、写真は掲載当時のものです。認定医・専門医・指導医、専門分野については2014年8月25日現在のものです。